

個人の意識が脱炭素につながる

株式会社日弘商会



▲ 工場で大量の鉄を加工する

株式会社日弘商会は、大型鋼材や軽量形鋼の加工などの事業を行なっている。鉄鋼業はその性質上、二酸化炭素を多く排出する傾向にある。今回の取材では日弘商会の社長を務める日向秀二さんに、顧客との関わり方や脱炭素を目指すための取り組みについて聞いた。

顧客ニーズに合わせて加工する

日弘商会は建築物を製造する10工程のうち2工程を担当し、必要な材料を加工して、次の工程を担当する会社へ受け渡す卸売を行なっている。今までは素材をそのまま売っていたが、現在では顧客のニーズに合わせて加工して売っている。商売で大切にしていることを聞くと日向さんは「納期と価格」と答えた。企業の信頼に関わる納期を守る

まち・ひと・しごと新聞

第9号

発行

三島信用金庫

駿東郡長泉町下土狩96-3

055-973-5730

制作

県立沼津東高等学校新聞部

県立菟山高等学校写真報道探究部

日本大学三島高等学校新聞部

県立熱海高等学校メディア班

協力

静岡県東部地域局

CO₂ 鉄鋼業が排出の1割を占める

鉄鋼業が排出する二酸化炭素の量は、日本の二酸化炭素排出量の1割を占めており、大きな課題となっている。そのことについて日向さんは「日弘商会では、水素で鉄を溶かす取り組みを行なうとしています。主に鉄を溶かすときに二酸化炭素が

▶トラックに鉄を積み込む



排出されるため、その過程で排出量を削減できれば、脱炭素につながるという。しかし、今すぐに二酸化炭素の排出量を減らすのは、労働環境や安全の面が優先されるため難しいという。日向さんは「必要なものを必要な分



▲ 取り組みについて語る日向秀二社長

だけ使い、あらかじめ段取りを決めておくことで二酸化炭素を削減することにつながると思います。それには従業員一人ひとりの意識の改革が必要です。企業が働きやすい労働環境の維持と脱炭素への両立が期待される。



▲日弘商会足高支部

日向さんに今後の日弘商会の展望について聞いた。日向さんは「現在、建築物が完成するまでの10工程うちの2工程

展望 夢は大きく 展色々な経験を

ほどを担当していますが、今後はもう少し小規模な製造の10工程すべてを自社で行なえるようにしていきたいと考えています」と答えた。

また、これからの社会を担う若い世代に対して「夢を大きく持つて欲しい」と思っています。失敗することは自分のためになるので、色々な経験をしてほしいと思います」と語った。

編集後記

今回の取材を通して、株式会社日弘商会は脱炭素に向けた取り組みを行なうにあたって、従業員一人ひとりの意識を変えていくことを大切にしていく企業であると伝わりました。たいへん貴重な機会をいただいたこと、協力してくださった皆様にお礼申し上げます。

「担当」
沼津東高校新聞部

安心して暮らせる地域に

山本建設株式会社

今回、葦山高校写真報道探究部は、脱炭素に取り組んでいる山本建設に取材を行い、環境への取組や建設業の魅力などを聞いた。また、葦山高校のトイレ改修工事担当者にも現場の様子などについて取材した。

狙いのシステムで脱炭素化へ

山本建設は積極的なSDGsへの取組により、持続可能な社会の実現に貢献し

ている。主に山本建設は「脱炭素」による二酸化炭素削減に力を入れている。また、2023年から2027年の5年間で二酸化炭素5%削減を目標とした中長期目標を立てた。

山本建設はこの目標を達成するため、エコポイントシステムを導入している。エコポイントシステムとは、環境にやさしいものを1個採用

したら1ポイントとし、その建物がエコなことが一目でわかるような、山本建設独自のポイント制だ。このポイント制について常務取締役の古田直人さんは「ものづくりを通して地域全体の脱炭素化に取り組んでいくことが建設業に与えられた使命だと考えています。エコポイントシステムを積極的に取り入れることで、地域全体の脱炭素化を間接的に作り上げられると思います」と語った。

また、山本建設は産業廃棄物の削減と資源の再利用にも取り組んでいる。資源の再生利用率は100%と、民間事業者の中では、圧倒的な達成状況だ。更に廃棄物の処理が適切に行われたかを管理するマニユフェストにより管理され、産業廃棄物の不法投棄を防止している。

山本建設は建設現場の課題を解決するため、ICTを導入

した。これにより作業の効率化が進み、今までは一人でこなしていた測量を一人で実施している。また、作業時間の短縮も可能になり、生産性の向上や電気代の節約にも繋がっている。

古田さんは建設業への思いについて「建設業は造った建物が残り、お客様の思いを形にすることが出来ます。また、建設業は建設現場の課題を解決するため、ICTを導入



エコポイントシステムについて説明する青木晴久さん（右）白藤郁さん（左）

エコ商品を取り入れ

山本建設はSDGsの取組として、エコ商品を採用している。選ぶ際は、環境マークが多くついているものを選んでいく。実際に使用されている間伐材は地盤改良に採用され、耐久性に優れている。

環境に配慮した工事を



▲工事中のトイレ

山本建設は12月まで葦山高校でトイレ改修工事を行なっていた。そこで施工管理を担当していた水口賢人さんと大橋力さんに現場の様子などを取材した。現場への臨場の際、以前までは管理者がその場で立ち合いをしていたが、Zoomでの遠隔臨場を取り入れた。これにより、長時間労働の防止に繋がり、働く社員の健康が維持されている。また、環境に配慮した静岡県の産の木材を使用している。「植える、伐る、使う」のサイクルを維持することで、森林が二酸化炭素を吸収し、木材が炭素を貯蔵することができる。これにより、二酸化炭素の削減や災害防止、地域経済の活性化などに貢献している。

現場監督の水口賢人さんは「様々なトラブルはありますが、終わったときにお客様から感謝の言葉をいただけるのは嬉しいです。現場監督は社長の代わりに現場をまとめ、責任感をもって仕事をすることが意識しています」と語った。



工事現場を見学する

変化していく働き方

山本建設は建設現場の課題を解決するため、ICTを導入

した。これにより作業の効率化が進み、今までは一人でこなしていた測量を一人で実施している。また、作業時間の短縮も可能になり、生産性の向上や電気代の節約にも繋がっている。

古田さんは建設業への思いについて「建設業は造った建物が残り、お客様の思いを形にすることが出来ます。また、建設業は建設現場の課題を解決するため、ICTを導入

編集後記

山本建設さんの取材を通して建設業の魅力や、環境に配慮したさまざまな取組を知ることができました。また、実際の工事現場での取材も貴重な経験になりました。

今回取材に協力してくださった方々にこの場を借りてお礼申し上げます。未熟な点も多いですが、楽しんでいただければ幸いです。

二面担当

県立葦山高校
写真報道探究部

～会社プロフィール～
所在地 三島市
大正7年創業
「一致協力良いものを作る」を社訓に、建築・土木工事などの総合建設業を営んでいる。令和6年には健康経営優良法人2024にも認定され、ダイバーシティの推進や持続可能な街づくりに貢献している。



山間に佇む「Villa SUGURO」



高野さんと握手



地元の食材を使用したジェラート



蔵の内装

もう一度人が集まる所に 土肥観光活性化

古民家に 新しい価値を

高野さんは主に、空き家であった古民家を改装した宿泊施設の運営を行なっている。客室は3つと少ないが全てが建物に丸々一棟改装したものになっている。改装には元の建物を活かした工夫がなされている。中でも、蔵を改装した客室では柱や梁、漆喰、桐箆などの家具、そして土壁などは当時のままに残している。他にも壁の一部に富士山の火山灰を使用したりと、自然を取り入れ落ち着いた空間を演出している。また、お風呂は源泉かけ流し純度100%

改装は 引き算で

このように元の建物を活かした改装を行い宿泊施設を運営している高野さんは「この施設を観光だけでなく、もう一度地域の人が集まる場所にしたい」と話した。というのも元々この建物は地域の地主の家である鈴木家が所有しており、昔は地域の人々が足を運ぶ場所だった。それを受けて高野さんは宿泊施設だけでなく、地域の人が利用しやすいものをつくり、

株式会社ARTH代表取締役の高野由之さんは、空き家になってしまった古民家をレストランや宿泊施設に改装し、土肥の活性化を目指している。他にも、自然エネルギーを利用した居住ユニットを開発した。土肥に貢献し続ける高野さんに活性化する思いを聞いた。

町興しに貢献している。そして、この姿勢は建物の改装にも表れている。高野さんの父親は古民家再生の建築家だった。父親の影響を受けて育った高野さんは、古民家などが好きだっ



客室内にある源泉かけ流し温泉



レストランの内装

たため古いものを大切に直す仕事に対して良い印象を持っていただけた。そのため、この改装の際も建物に多くを加えなかった。これを高野さんは引き算と話し「日本人は古いものを愛する」という意識を醸成して、上から加えてしまう。しかし、あえて隠さずありのままの状態に

世界の最先端が西伊豆に



テスラの蓄電池を説明する高野さん



『ウェザー』からの景色

快適な 空間作り

自然エネルギーのみで暮らせるウェザーは世界初のオフグリッド型住宅。オフグリッドとは水、電気などのインフラなしに普段

の生活が出来る居住施設だ。ここ土肥では、ウェザーを宿泊施設として体験出来る。ウェザーには、3つの特徴がある。1つ目は、電気の自給を行っている。ソーラーパネルで発電をし、それを蓄電池に貯めることで自給が可能になっている。

SDGsで考える
ウェザーは、SDGsの観点から、2つ目は水の自給。雨水を濾過し、殺菌などを施して自給している。また、水質基準をクリアした日本初の例である。3つ目は、特殊な建物の構造だ。ウェザーは、6つのコンテナサイズのプロックで出来ている。

高野さんは「学校で学んだ事が、今に活かしている。学校での学びを大切にしてほしい」と思いを述べた。

ウェザーは、SDGsの観点から、2つ目は水の自給。雨水を濾過し、殺菌などを施して自給している。また、水質基準をクリアした日本初の例である。3つ目は、特殊な建物の構造だ。ウェザーは、6つのコンテナサイズのプロックで出来ている。

高野さんは「学校で学んだ事が、今に活かしている。学校での学びを大切にしてほしい」と思いを述べた。



土肥の山と海に囲まれた「ウェザー」

この地を選んだ理由
沖縄や高知県などの様々な場所でも事業を展開している高野さんに、なぜ西伊豆の土肥という場所を選んだのか話を聞いた。「他の観光地である熱海や伊東はホテルが多くできてしまいがち、自然の美しさが失われているため、土肥という場所の方が起業した会社のコンセプトにあった。土肥観光の活性化をしていく中で、どのようなお客様をターゲットにするかという点で、2つ目は水の自給。雨水を濾過し、殺菌などを施して自給している。また、水質基準をクリアした日本初の例である。3つ目は、特殊な建物の構造だ。ウェザーは、6つのコンテナサイズのプロックで出来ている。

高野さんは「学校で学んだ事が、今に活かしている。学校での学びを大切にしてほしい」と思いを述べた。

高野さんは「学校で学んだ事が、今に活かしている。学校での学びを大切にしてほしい」と思いを述べた。



土肥を支える高野由之さん

編集後記
今回取材をしていく中で、西伊豆の土肥がどのような場所なのか、どう工夫を施して地域を活性化していくのかを詳しく知ることができました。他にも、SDGsへの取り組みや古民家を無駄なくリノベーションした経緯も聞くことができました。今回の取材を通して、様々な経験をすることができました。ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

担当
日本大学
三島高等学校
新聞部

未来へつなぐ海 熱海だからこそできることを

美しい環境を未来へ

ここ十数年、連日の猛暑日が続いたり、台風や土砂災害などの自然災害が増えたりしている。このままこのような状況が続くと、これ以上気温が上がり、今よりも自然災害が増えるなどのことが予想される。猛暑や自然災害により、甚大な被害を受けている現代の環境に対して、脱炭素化を目指し、ゼロカーボンからマイナスカーボンへ現代の環境に変化を起そうと行動している人にスポットを当てる。今回私たちは、熱海の地で環境活動に取り組む企業に話を伺った。

現在、環境問題にどこよりも真剣に取り組む企業がある。株式会社未来創造部は、環境について何か自分たちにできることはないかと考え、起業した。この未来創造部、最初は熱海マリンサービスというマリンリゾートをサポートする会社の一部署だったが、補助金に頼らず、自分たちの力で環境を良くしていきたいという思いから、会社として独立した。そのため他の企業では見られないような独特な会社名になった。

光村さん（写真中央）と本校生徒



現在、海外の企業では日本に比べて二酸化炭素の排出量を減らす努力をしている。しかし、日本ではあまり進んでおらず効果が感じられない。日本では、二〇五〇年までにCO2排出量をゼロにするゼロカーボンに取り組んでいるが、未だに達成の見込みが立っていない。

未来創造部を生み出した2人

株式会社未来創造部は、世界各地を飛び回りながら環境問題に立ち向かう代表取締役社長・枝廣淳子さん、そして地元に関わりながら持続可能な活動を展開していく代表取締役副社長・光村智弘さんの2人によって立ち上げられた企業だ。「未来の子どもたちにきれいで楽しい地球を残す」というミッションを達成するため、グローバルの知恵や技術を借りて研究・調査に裏打ちされた実践活動を進めている。また未来創造ユースチームという、それぞれの分野や地域で持続可能な未来を創りだそうと行動している、またはそういった意欲のあるユースの方々のためのゼミを開催している。



枝廣淳子社長

枝廣淳子さんは、環境ジャーナリストとして温暖化やプラスチック問題を解決に導くのと同時に、地方創生や地域経済の活性化などに取り組んでいる。29歳から2年間の米国生活で英語を身につけ、帰国後に同時通訳ができるようになる。翻訳を通じて環境問題を知るうちに、自ら発信していこうと思い活動を進めている。

光村智弘さんは、ヨットや帆船を販売している熱海マリンサービスの社長だ。熱海を理想のオーストラリアのマリーナに近付けるために、ビーチ文化を立ち上げ支えてきた実績を持つ。



パイオ炭について解説する光村さん

炭化プロジェクトとは、廃材や竹、野菜くずなどの廃棄物が処分場で焼却処分されるときに生じるCO2を固定化すること、処理費を削減し、処分に発生するCO2を削減することもできる施策である。炭化によって発生した炭は、畑などの肥料に使われている。また、植物系の不要物を炭化することで、植物が成長する過程で大気中から吸収した炭素を半永久的に固定化することができ

環境を守るために 出来る事

炭化プロジェクト

現在、未来創造部では炭化プロジェクトを行っている。炭

きるため、温暖化対策としてのCO2の固定化の手段としても炭化（パイオ炭）が注目を集めている。

■ブリキキャッチプロジェクト
海にプラスチックごみがたまるのは川からきていることが多い。元から断ち切るために川のごみ拾いを行っている。しかし、それでも取れないことが多い。また、網を放し置くと破れてしまう



炭となった栗

もそれでも取れないことが多い。また、網を放し置くと破れてしまう



実はごみを取っている

しまう。そのため、未来創造部では生ごみを無くすためキエーロというコンポストを会社の屋上に設置した。普通のコンポストでは生ごみを入れていくうちに量が増えていくのだが、未来創造部のコンポ

編集後記

今回の取材を通じ、環境問題に取り組む人たちの熱意が感じられました。環境という身近なものについて若者である私たちが考えるきっかけになったと思います。

熱海の伊豆山の土砂災害のこともあり、私たちの近くにまで自然の驚異が迫っており、これを改善するために自分達ができる環境対策を地道に取り組むことで世界は変わっていくと信じています。

▼今回の光村さんの取り組みを見て、コンポストを設置したり、廃棄物を炭化したりして、少しでも二酸化炭素の排出量を減らすと、努力してくる企業が増えてほしいなと思います。また、日本に海外から投資が入ってきていないのは、ゼロカーボンに向けて取り組んでいることが原因と話していました。これから

■ブルーカーボン・プロジェクト
さらに、ブルーカーボン・プロジェクトも行っている。ブルーカーボンは海洋生態系によって大気中の二酸化炭素を吸収して炭素にするものだ。だが、現在の熱海には藻が少なく二酸化炭素を炭素にさせることができないのである。そこで、ブルーカーボン・プロジェクトはブルーカーボンを増やすため藻場再生を行っている。最初は、ダイビングで藻の成長や管理を行っていたが、船の魚群探知機を使ったり工夫をして予算を抑えて行えるようになった。



■コンポスト
ごみ袋の中に生ごみを捨ててしまうと、紙などのリサイクルをすることができず、物が水を吸いリサイクルできなくなってしまう。コンポストは微生物が生ごみを分解してくれるので総量を増やさずに生ごみを入れ続けることができる。コンポストでは、漁師が魚を入れるトロ箱を使っている。使い方は、生ごみをコンポストに入れ潰して土に埋め、次に入れる場所にスコップを刺す。それだけで生ごみを減らすことができる。コンポストで生ごみを減らすことで、ごみを捨てる行く回数減らしたり、紙などが資源ごみになったりして環境を良くすることが出来る。

熱海高校 総合探究メディア班

【四面担当】